

令和 8 年 度 学 校 経 営 計 画

1 学校教育目標

一人一人に応じた健康の回復を目指し、自己教育力の育成を図るとともに、進んで社会参加できる児童生徒の育成に努める。

＜校 訓＞ 『 明朗 克服 協力 』

2 学校の特徴

- ・在籍する児童生徒のほとんどは、病院に入院して病気治療しながら通学しており、常に医療と密接に連携した教育を実施している。
- ・児童生徒一人一人の実態を的確に把握し、障害や病気の状態に応じた個別の教育支援計画及び個別の指導計画を活用することで、個に応じた指導の充実に努めている。また、他機関との連携を推進している。
- ・病気の状態や障害の特性等を考慮し、ＩＣＴ機器を積極的に利活用し、基礎・基本の定着と個性の伸長に努めている。
- ・学校行事や体験学習を通して、豊かな知性と情操を育むとともに、集団の中で協力し合える豊かな社会性を育成するため、他学部・他学年との合同学習や行事等を通じた交流の機会を設定している。
- ・年度途中での児童生徒の転出入が多いため、前籍校や転出校との緻密な情報共有を図っている。

3 学校の現状と課題

- ・小・中・高等部では、心身症や適応障害等の精神的な疾患を抱える児童生徒が大多数を占めている。前籍校では、不登校や保健室登校を経験していることが多く、それにより基礎的な学力や体力、対人関係能力、コミュニケーション能力等に様々な課題を抱えている。また、本校在学中の多くの時間を病院で過ごすため、社会経験が不足しがちであり、人間としての調和のとれた育成を目指す指導が重要となっている。
- ・訪問教育の児童生徒については、病状の多様化や障害の重度・重複化がすすみ、常時高度な医療的ケアを必要とするケースが増加してきている。このため、学習時間や学習場所、使用できる教材教具等に多くの制限がある。さらに入院生活が長期にわたることで、関わる人が家族、医療関係者、教職員等に限られ、同年代の児童生徒との関りが少ないという課題がある。
- ・学校生活における児童生徒の安全・安心の確保のためには、既存の危機管理マニュアルの見直しや、新たな状況に対応した危機管理マニュアルの整備と教職員への周知、緊急対応訓練の実施の必要性が求められている。
- ・病弱の児童生徒は、療養生活による情報不足や情報入力のアンバランスさや、語彙力、読解力に偏りがみられる。身体的制限や体調の変化に応じたＩＣＴ機器の代替機能を活用しつつ、読書に親しみ活字に触れることで、卒業後の生涯にわたる学びの基盤となる「多様な言葉」と「多角的な視点」を育む機会を意図的に設定する必要がある。

4 学校教育計画

項 目			目標・方針及び計画	
1	学習活動 重点 1	小学部	目標	○基本的生活習慣を身に付け、基礎学力の定着を図るとともに、生き生きと活動できる児童を育成する。
			計画	○児童一人ひとりに応じた学習目標を設定し、学習内容の工夫や I C T 機器の活用により、意欲的に学習へ取り組める環境を整える。 ○多様な学習活動や学校行事を通して児童の主体性を育み、成就感や自己肯定感を高める。
		中学部	目標	○基礎学力の向上と学習習慣の定着を図り、自己実現に向けて学習に取り組む意欲と力を育成する。
			計画	○学習空白の補填や学力向上を目指し、個に応じた学習目標と学習計画を立てて指導を行う。 ○病院との連携により安定した登校を支援し、学習活動や行事への参加を通じて達成感や自尊感情を育てる。
		高等部	目標	○自立と社会参加に向けて課題を見出し、自ら課題に主体的に取り組む力を育成する。
			計画	○生徒の実態や希望を踏まえた目標を設定し、学力や体力の向上、資格取得などに意欲的に取り組めるよう支援する。 ○学習活動や行事の係活動などを通じて、責任感と集団活動への主体性を養う。 <u>○生徒の興味・関心の幅を広げたり考えたり感じたりする力を高めるよう、読書活動の推進を図る。</u>
			目標	○保持している感覚機能や身体機能を維持し、周囲の人や物と関わろうとする意欲を育成する。
		訪問教育	計画	○様々な感覚に働き掛けるために、個に応じた教材・教具（I C T 機器等）を効果的に活用する。 ○自身に関わる人に関心をもち、働き掛けを受け止めたり、それに応じたりする経験を積めるように支援する。 ○病院の療法士や外部専門家等と連携し、支援の方法等について情報交換をするなど、教員の専門性の向上を図る。
			目標	○児童生徒が自らの健康課題や病状を正しく理解し、課題解決に向けて主体的に行動できる力を育成する。 ○健康に関する意識を高め、基本的生活習慣を身に付け、健康の保持・増進を図る。 ○安全な学校生活及び病院生活の実現を目指す。
		学校生活 重点 2	計画	○病状の多様化・重度化に対応するため、病院と連携し、学習活動の工夫と病状理解の支援を行う。 ○保健指導や保健だよりを通じて健康に関する情報を提供し、望ましい生活習慣の定着を促す。 <u>○避難訓練を通して危機管理マニュアルの改善をするとともに、教職員の共通理解と対応力を高める。</u>
3	進路支援 教育相談	目標	計画	○学校説明会等や教育相談、ホームページ、市町村教育センター等への訪問を通じて、病弱教育への理解啓発を図る。 ○就業体験や卒業生の事例を紹介し、卒業後の生活を具体的にイメージできるように支援する。 ○卒業・転学後 3 年間のフォローアップ計画に基づき、定期的または必要に応じて連絡や訪問を行う。

4	特別活動	目 標	○学校行事や児童生徒会活動等を通じて、個性の伸長と社会性の育成を図る。 ○異年齢交流を通じて、人と関わることの喜びや主体的に関わろうとする態度を育てる。
		計 画	○児童生徒会活動・委員会活動を通じて、規範意識や社会性の育成を促す。 ○レクリエーション大会等、異年齢による集団活動を多く設け、児童生徒同士の関わりを促進する。
5	その他 (専門性の向上)	目 標	○「児童生徒の自立と社会参加に向けた支援の在り方～自立活動の指導の充実～」を研究主題とし、学校全体で共同研究を推進する。
		計 画	○研究期間とした令和6～8年度の最終年度である今年度は、S(See・Search)PDCAの流れを意識した研究を、学部あるいはグループで展開する。 ○障害特性や病状への理解を深めるため、外部講師による研修を実施する。 ○校内研究では教職員のニーズに応じた内容を取り上げ、見通しのある計画と意見交換しやすい環境づくりに努める。

5 今年度の重点課題（学校アクションプラン）

令和8年度 富山県立ふるさと支援学校アクションプラン - 1 -	
重点項目	学習活動（高等部）
重点課題	読書活動の推進
現 状	○ 生徒に余暇の過ごし方について尋ねると、携帯電話やタブレット端末等を使用する、ゲーム機を使用する、家族や友人と過ごすなどが挙がる中、日常的に本を手にする生徒は少なく、図書室を利用している姿もあまり見られない。 ○ 体調等の理由から、生徒によっては、人と関わる機会や同年代同様の生活の経験が十分とは言えず、得られる情報が少なかったり、偏りがあったりする。
達成目標	○ 一人当たりの年間図書貸出の冊数
	3冊以上（高等部生徒の平均冊数）
方 策	○ 生徒や教員の推薦図書を紹介したり、図書室利用を学級で定期的に行ったりするなど、書籍に触れる機会を設定する。 ○ 図書室利用回数や貸出冊数、読んだ書籍の冊数等を可視化し、読書に関する状況に意識を向けるよう促す。 ○ 互いに見識を広げたり深めたりすることをねらって、紙、電子、音声の形態を問わず、読んだ書籍について発表する機会を設ける。

（評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:現状維持 D:現状より悪くなった）

令和８年度 富山県立ふるさと支援学校アクションプラン - 2 -		
重点項目	学校生活（生活支援部）	
重点課題	危機管理マニュアルの改善と教職員への周知	
現 状	○ 昨年度、危機管理マニュアルの見直しや新規作成を行ったが、緊急時に実用性の高いものになっているか検証するため、避難訓練を通してさらに改良していく必要があると感じている。 ○ 地震や土砂災害、クマの出没等、緊急時における全教職員の迅速で的確な初動対応が重要であり、そのための危機管理マニュアルやアクションカードの周知が急務となっている。	
達成目標	○ 避難訓練や他校との情報交換、研修会への参加を通して危機管理マニュアルやアクションカードの改良を行うための検討会の実施。	○ 年３回の避難訓練の前に初動対応の内容を全職員に周知する取組の実施。
	年間３回以上	年間３回以上
方 策	○ 年３回の土砂災害、地震・火災等の避難訓練後にアンケートを行い、危機管理マニュアルやアクションカードについての改善点を集約し反映させる。 ○ 他校の危機管理マニュアルやアクションカードの活用等について情報交換を行い、防災体制について実効性の高い内容を反映させる。 ○ 避難訓練の各回ごとに事前に説明動画等で対応への周知を図り、避難訓練後のアンケートで周知の方法についても教職員から意見を募り検討する。	

（評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:現状維持 D:現状より悪くなった）